ビッグマン愚行録

鈴木健二

新潮文庫

ッグマン愚行録

草279=1

昭和五十七年十一月十五日　印刷
昭和五十七年十一月二十五日　発行

著者　鈴木健二
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六—五一一一
編集部(〇三)二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

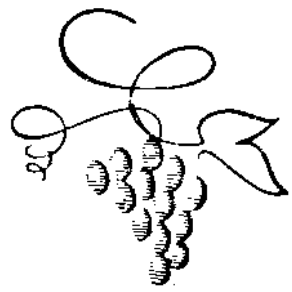
㊀ 印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Kenji Suzuki 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-127901-2 C0195

新潮文庫

ビッグマン愚行録

鈴木健二著



新潮社版

2928

はじめに

どんなふうに生きてみたところで、たかが人生である。でっかいことをしているようでも、考えかたによっては、実にちっぽけな仕事しかしていないし、ほんの申しわけ程度のわずかなことが、案に相違して、とてつもなく大きな反響を呼んだりする。

「今」という時は、その中に自分がほうりこまれてしまっているので、わかっているのは小さな断片たけである。それを全部つなぎあわせる暇もゆとりも方法もない。ちょうど、われわれが体験した戦争が、戦闘行為は終ったのに、その後、何十年たっても、あちこちに傷跡が残っていて、はたして戦争とはどんなものであったのかが、もどかしいほどわからないのと同じである。そうこうしているうちに、次の戦争をおっぱじめてしまうから、余計にわからなくなり、とどのつまりは、歴史とは何かまでを問い詰める結果になる。

ましてや、自分がどう生きてるのかを、自分で理解しようとするなどは、そのこと自体が愚かしいと思われるほどに、無意味無益な行為であるに違いない。それなのに、なぜか人間は自分の過去や現在に無理を承知の上で、どうにかして解釈をつけたがり、他人から見れば、面白くもおかしくもない事柄を、ひとりで喜んだり悲しんだりする。全く人間なんて、手のつけようもない生きものである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

こ多分にもれない点では、私もひけを取らない。職業はちょっと人とは変った水商売だか、しょせんは一介のしがない月給取りであるのだから、平々凡々と家と職場と、時にはなわのれんの間を三角形に歩き、カミサンの顔色をうかがい、こどもの学校の成績におろおろし、出張旅費か一円でも安く上がれば、急に大金持ちになったような気になり、ジャイアンツが勝ったか負けたかで、きげんがよくなったり斜めになったりする毎日を送っていればいいはずなのである。

確かに、私自身はそうしている積りなのである。ところが、こんなこともあったなあと、原稿用紙に書きとめ、それが雑誌にのったりすると、皆が笑うし、いやあ、経験豊かですなあと言い、人生が愉快でしょうねと、肩をたたいてくれたりする。

自分としてはきわめて当り前に暮したはずなのである。世の中があべこべなのである。異常に対して無感覚で、正常には感動するのだ。

たた、いささか古めかしいロマンティシズムのかけらを持ちあわせているらしい人間であることは、自分でも感ずる。たとえ失恋しても、去って行く人の後ろ姿に、永遠に幸あれと祈る時代物的心情がどこかにある。

「若いということは、それたけで美しい。一人の人間の魂を自分の手の中に収めるのは、星の世界のすべてを獲得するよりも、はるかに尊く難しいことなのた」

「木の葉のそよき、風の音にも、静かに耳を傾ける心は、芸術を愛し、人を愛する心である」

というような言葉に、むやみやたらに涙を流さんばかりの感激を覚える。それか良い面に表

われれば、鈴木健二なる人物は、本当のビッグマンなのたか、ややもすると、親代々の江戸っ子気質なのてあろうか、ろくすっぽ考えもしないで事に立ち向かってしまい、あとになって、あーあ、またやっちゃった、何てばかなんだろうなあ、二度とはやらないぞと決心すればいいのたが、それより先に、また手が出てしまうのてある。

本書の第一部は皮肉なことに、倒産して社長か夜逃げをした小さな出版社の雑誌に連載していたものに加筆し、第二部はもともと『生々酒転』という題で、昭和四十六年ころ、「小説新潮」に連載したのを、ある出版社がまとめにかかったが、途中でこれまた倒産してしまったという変な因縁かある。しかもこの両方をまとめた某大出版社か一般図書部門の売行き不振で発行間もなく絶版するというとにかく波瀾万丈の生涯を送った本てある。そしていま、私自身がびっくりするような偉大なるタイトルで、再び日の目を見たのてある。請うご憫笑、これんびん、こケーベツ、その他、すへてのさげすみ、むち打つものは何でも……。

一九八二年初冬

鈴木健二

目　次

第一部　ビッグマン・海外紀行
ビッグマン誕生……一三
エニハントタクシー……二五
赤道直下の食あたり……三九
インドっ子と江戸っ子……五一
ロシア赤げっと……六六
ニエット連邦の女……八〇
真夜中のモスクワ……九四

第二部　ビノグマン・青春譜

酔いとれエレジイ　一〇七
酒徒の動物記　一二〇
断酒断雀　一三三
春の祭典　一四七
青春ばんたい！　一六一
ルンペンの歌　一七四
海坊主異聞　一八九
夕陽のカーマン　二〇二
狼かやって来た　二一七

解説　富永一朗
カノト　南伸坊

ビッグマン愚行録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一部、ビッグマン・海外紀行

ビッグマン誕生

「グッド　モーニング」

少なくともそれは私が外国で外国人に話しかけた最初の英語であった。だいたい私は旧制弘前高校では文科甲類といって、英語の授業時間がいちばん多いクラスに入っていたが、戦中戦後の英語だから、辞書を引いて訳せばいいだけのことであって、発音はハの字も習ったことはない。大学では美学美術史が専攻で、一転してそれまで最も苦手としたドイツ語がテキストであり、間にまじってぽつぽつとフランス語があり、ろくに授業にも出なかったので卒業論文に困ってしまい、教授連中のあまり知らないところと考えた挙句に、バレエ史とその理論を苦しまぎれに思いつき、そのため初歩のロシア語やスペイン語を独学する羽目に陥ったが、英独仏

露西どれをとっても初級の上がいいところで、いざ話すとなると、幼稚園にあがるちょっと前ぐらいである。

しかし私は生れて初めて行った外国であるインドで、言葉もできないと嘲笑されるのもしゃくなので、一晩中、これまた初めて乗った国際線の飛行機の中で、前途の不安におびえながら、まんじりともせず、おまけに税関などというあまり気持のよくない場所を通過してきて、少しばかりモーローとした頭を励まして、着いたホテルのフロントで胸を反らせて言ったものだ。

「アイ　アム　スズキ　ジャパニーズ　フロム　トウキョウ」

トウキョウのトの字にむやみに力を入れて、さも英語らしく聞かせようとする自分がいじらしかった。するとどうであろうか。明け方の寝ぼけ眼のフロントは、見る見るうちに目をカッと開いた。インド人は目が大きくて、頭の後ろをトンとたたくと、目が飛び出すのではないかと思うくらいたが、その目かはち切れるほど開いた。そして言った。

「オウ、ビッグマン」

これが私にはビッグマンと聞えた。ビッグとピッグでは大違いである。なるほど、私は百六十七センチて約八十キロと、豚のような体である。しかし、初対面でいきなり「豚男」とは何たる無礼であろうか。

「なにィ」

先祖代々の持って生れた気短かな江戸っ子気質で、思わず日本語か出て自分であわてた。

「ホワット　ドウー　ユー　セイ」

てやんでえへら棒めェぐらいの威勢で言うつもりたったが、頭の中で一度文章をこしらえてから、はたしてそう言うのかどうか頼りなさそうに発音するのだから、まどろっこしい。

「オウ　エクスキューズミー。アー　ユー　サン　オブ　スズキ？」

鈴木の息子かと聞かれて私はうんとうなずいた。インドという所はなるほどカースト（身分制度）が厳しい国だけあって、旅行者にはだれの息子かと聞くのかと思った。するとまた、

「オウ　ビッグマン」

と、ターバンか抜けるほとびっくりして彼は叫び、卓上のベルを鳴らすと、ボーイが飛んで来た。そしてヒンディー語で何やら言うと、

「オウ　ビッグマン」

と、ボーイも叫んだ。そして記帳もしないのに、そばに置いた私のトランクを持ち、プリーズ　プリーズとあまり上等でなさそうなエレベーターの方へ案内しようとする。

「ホワット　イズ　ピッグマン」

私はもう一度聞いた。するとフロントは、

「オー　ノー」

と、どこかで聞いたようなセリフを言い、両手をひろげてびっくりし、

「ビッグマン、ビッグ　グレイト、グレイト、グレイトマン」

と連呼したので、ははあ、豚野郎ではなくて、偉い人という意味だったのかと合点したか、どうしてこの見ず知らずの国で私はビッグマンなのだろうと不思議に思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com